

【教育実践報告】

小笠原の自然・歴史・文化と学校教育 前篇

「総合的な学習の時間」の展開と特色ある学校づくり

国際関係学部特任教授 高崎 彰

1 はじめに

私は平成13年4月から平成16年3月まで、東京都の小笠原村立小笠原中学校に校長として赴任した。中学校においては平成14年度より実施された『中学校学習指導要領』（平成10年度告示）により、新たな領域として創設された「総合的な学習の時間」が準備・実施され始めた時期である。私は同校の教職員と共に、様々な試行錯誤を繰り返しながら、この「総合的な学習の時間」創設の願いが達成できるよう、その実現に向けて、計画的に取り組んだ。この教育実践報告は小笠原村立小笠原中学校での具体的な取り組みの内容について紹介したものである。

前篇では「総合的な学習の時間」の導入期における中学校での実践の概要について、今後執筆する予定の「後篇」においては、私の在任時に可能となった中学生による「硫黄島戦跡・慰霊塔参拝」や、小笠原特有の伝統芸能「南洋踊り」（東京都無形文化財）の来歴と、学校教育における伝統文化の継承などについて実践報告をおこないたいと考えている。

2 小笠原のあゆみ

東京から約千キロ南の海上に小笠原の島々はその美しい姿を見せている。第二次大戦後、米軍により占領されていたが昭和43年に日本政府に返還され、現在は東京都小笠原村となっている。住民の居住している島は父島と母島で、米軍占領時代には、父島に「ラドフォード提督学校」というアメリカンスクールが設立され、英語による授業が行われていた。

返還後は父島に小笠原村立小笠原小学校と小笠原中学校及び東京都立小笠原高等学校の三校、母島には小笠原村立母島小中学校が一枚設置されており、各学校では小笠原固有の特色ある自然や伝統文化を生かした「総合的な学習の時間」や学校行事に工夫を凝らし、充実した教育活動を行っている。

小笠原中学校は私の着任当時、生徒51名、教職員15名という小規模な学校であったが、港のある二見湾の見える丘の上の素晴らしい環境の中にあった。

3 小笠原の印象

小笠原での私の最初の印象をここにいくつか紹介したい。（校長の日記より抜粋）

「平成13年3月28日に私は父島の小笠原中学校に赴任しましたが、はや3ヶ月が過ぎようとしています。1学期の学校行事も、あとは【遠泳大会】と【終業式】のみとなりました。5月には9泊10日の【修学旅行】、6月には硫黄島への遺骨収集を兼ねた【移動教室】、さらに無人島への【全校遠足】など、小笠原ならではの学校行事も多く、あっという間の1学期でした！4月、5月には雨も多く、涼しい毎日が続きましたが、6月にもなるとすごい暑さと晴天の日が続き、小笠原高気圧の威力はさすがだなと思知らされました！

小笠原の印象 その① 【アメリカン・ライフスタイルが残っている】

【アメリカ軍政期】のライフスタイルが色濃く残っている。官庁などの昼休みは12時から1時半までで、多くの人は自宅に帰ってランチをとり、一休みして午後からの仕事に備える。学校も【給食】がないので、生徒は自宅に帰るか、弁当を学校で一緒に食べる。

したがって、昼の教職員の【休憩時間】の45分は完全にとれる。職員住宅までどの先生も10分くらいしかかからないので、朝も早くから出勤し、各自校舎や校庭の掃除・除草作業などを自主的に行ってくれている。

小笠原の印象 その② 【戦争の記憶がまだ生々しい】

至る所に旧日本軍が構築した軍事用の壕やトーチカが口を開けている…。戦争中に沈められた船舶の残骸が青い海の至る所に残っている…。深いジャングルの中には日本軍の車両や高射砲などがそのまま放置されている。つい最近までは元空港には【戦闘機】の残骸もあったという。

南の【硫黄島】(小笠原村所管)にはまだ一万の将兵や一般住民の遺骨がそのまま眠っている…。旧島民の帰島の願いはまだ叶えられそうにない。

【欧米系住民】や、【カナカ系住民】(太平洋の島々の人々)の子孫も父島には住んでいて、日本軍によって強制疎開させられたことや、アメリカ軍政期の出来事を今でもよく覚えている。

キリスト教の教会【聖ジョージ教会】はあるが神社のみで、お寺はない。

小笠原の印象 その③ 【国や都や村の組織がコンパクトに存在している】

学校から見える二見湾には【自衛隊】の艦船がいつも停泊している(当時)。校長として自衛隊の艦長に招待され、正装した士官達と艦上での昼食会に参加することもある。

中学校の【遠泳大会】には、自衛隊、海上保安庁、気象観測所、警察署、小笠原支庁、小笠原村役場、漁協などから応援のため、多くの伴泳者や船舶が参加してくれている。

宇宙工学や自然保護関係の研究者や専門家も多く島に滞在しており、都立大(当時)の教官による組織的な支援を学校は受けることができる。

小笠原の印象 その④ 【素晴らしい自然が残されているが、環境破壊も心配である】

クジラやイルカの唄う青い海の広がりも素晴らしいが、亜熱帯の緑の森の美しさも見事である。地形も変化に富んでおり【オガサワラオオコウモリ】や【アカガシラカラスバト】など貴重な絶滅危惧種も多い。森の中には、【グリーンペペ】という夜光茸の群棲地があり、雨季の暗い夜の森を飾っている。【ハネアリ】の大群の来襲もスゴイ!

しかし外来種の異常繁殖など心配なことも多く、小笠原本来の自然を維持するためには相当な努力が必要である。子ども達は【小笠原海洋センター】の【アオウミガメ】の生簀の中で親ガメと一緒に泳いで甲羅につかまったり、子ガメに餌をやったりして貴重な自然についての理解を深めている。無人島での外来植物の除去作業なども村民や生徒のボランティアが協力して行っている。

小笠原の印象 その⑤ 【校長の仕事の第一は学校環境の維持である】

校長がサボっていると校庭や広いグラウンドはすぐ背の高い草に覆われてしまう。亜熱帯の植物の成長は凄まじい。島の校長の仕事の第一は草刈り鎌や【ブッシュ・クリーナー】を使って背の高い草と格闘することである。真上からジリジリと照らしつける太陽に焼かれながら2時間も作業すると目がクラクラしてくる。

学校プールの水質を管理することも夏場の校長の重要な職務である。島の貴重な水資源を大切に使うために、水に浮かぶゴミや虫などを除去し、水底に沈んだゴミを専用ポンプで除去するなど努力している。すべてプールの中に水着で入っての作業である。

小笠原の印象 その⑥ 【島には様々な音楽や踊りが満ち満ちている】

父島には、ミクロネシアから伝わった【南洋踊り】や、ハワイから持ち込まれた【フラ】、ジャマイカが発祥の地といわれる【スチールパン】と呼ばれる打楽器もある。その他に伝統的な【八丈太鼓】などの愛好者も多い。

満月の夜になると音楽愛好者たちが得意な楽器を持ち寄って白砂の浜辺に集まってくる。まず月の出を祝うように【カカ】と呼ばれる太い木をくり抜いた木製のドラムが叩かれる。そして、いよいよ島の＜音楽会＞の始まりである。一抱え以上あるような【タマナ】という大木の幹をくり抜いた【カカ】の音色はとても迫力があり、聴く者の内臓を震わせるような凄い音をする。

月が中天高く昇る頃、打楽器の音たちは最高潮に達する。とんとんというリズムに合わせて参加した人々の持参した笛や弦楽器による即興のメロディーが奏でられる。声に自信のある人は南の島々の懐かしい【小笠原古謡】を歌い始める。自然に踊りの輪ができ、皆楽しそうに踊り始める。涼しい潮風と、遠い夜の海から押し寄せてきた潮騒の音が海に響き、楽器の音色と歌声を更に美しく飾りたてている。

いろいろと列挙したが、小笠原では私自らの生き方を再点検し、教員としての生活を再構築する意味でも、毎日新鮮で貴重な体験をすることができた。」

4 特色ある学校づくり … 小笠原の伝統と教育資源を生かした学校づくり

私は校長として初めての「総合的な学習の時間」の本格的な実施の時期にむけて、小笠原における伝統文化や教育資源、東京都の遠隔地ならではの特色を生かしながら、様々な実践を試み、特色ある学校づくりに努めていった。

下記の表-1は、様々な学習課題を踏まえて、島内の伝統文化や様々な教育資源を私なりに分類してまとめたものである。

表-1 小笠原中学校を取り巻く学習環境と教育資源

学習課題	伝統文化と学習環境	様々な教育資源
国際理解教育	欧米系・カナカ系住民 キリスト教会、 旧「ラドフォード提督学校」の教育	国際協力事業団・国際ワーク・キャンプなど 多くの外国人の来島
伝統文化	小笠原太鼓(八丈系)・南洋踊り(メ ラネシア系)・タコの葉細工など	父島クラブ(老人クラブ)・各種保存会
平和教育	父島・母島・硫黄島に残る多くの 戦跡・住民の強制疎開の記憶	硫黄島訪島(移動教室)…中学校2年生 による慰霊祭参加・自衛隊基地見学

環境教育	海洋生物（ゾラ・イカ・アサギ） 亜熱帯性植物の在来種と外来種 絶滅危惧種（オガサワラオオコウ モリ・アカシガラサト・アホウドリな ど） 野ヤギの増殖	水産センター・海洋センター・ホール・ウ オッチング 協会・気象観測所・亜熱帯 農業センター・都立大学（当時）小笠原 委員会・自然文化研究所・野生生物研究 所・宇宙開発事業団・国立天文台観測局 （VERA）など
福祉教育	介護者教室・ゲートボール教室 生徒会による除草・海浜清掃など	保健所・社会福祉協議会 明老会・高齢者在宅サービスセンター
情報教育	情報機器・接続環境の整備が必要、 ソフト活用の工夫	N T T ・小笠原ネット

5 「総合的な学習の時間」では どのような学力を育てるのか。

（1）ねらい （ 現行の『中学校学習指導要領』平成 20 年 3 月 28 日告示より ）

「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。」とあるが「総合的な学習の時間」は従来の教科・科目と比べると、次の様な新しい特徴をもっている。

- ① 教科・科目のように学習指導要領に規定された内容を教科書で学ぶのではなく、「学び方」を学ぶ。従ってその内容は規定されていない。
- ② 知識・理解・技能を重視した系統的な学習よりも、体験的・問題解決的な学び方を重視する。
- ③ 教科・科目の様な基礎的・基本的な内容よりも、発展的な内容や個に応じた内容に取り組む。
- ④ 数値的な評価は行わない。

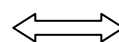
（2）学習内容や学習課題の選択 （ 『中学校学習指導要領』同上 ）

- ◇ 国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題
- ◇ 児童・生徒の興味・関心にもとづく課題 ◇ 地域や学校の特色に応じた課題
- ◇ 職業や自己の将来にかかわる課題（ 新出 ）

（3）様々な学習方法等の導入 （ 『中学校学習指導要領』 同上 ）

- ① 問題の解決や探求活動
- ② 他者と協同して問題を解決しようとする学習活動
- ③ 言語によって分析し、まとめたり表現したりする学習活動
- ④ 自然体験や職場体験活動、ボランティア活動などの社会体験
- ⑤ ものづくり、生産活動などの体験活動
- ⑥ 観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動
- ⑦ グループ学習や異年齢集団による学習
- ⑧ 職業や自己の将来に関する学習（平成 24 年度より新出）

表-1のような小笠原特有の伝統文化や学習環境・教育資源を活用する。



(4) 「総合的な学習の時間」の授業時数の推移 (総授業時数) 時数

小・中学校においては平成 14 年度より実施

小学校 3 年 (910) 4 年 (945) 105 5・6 年 (945) 110

中学校 1 年 (980) 70~100 2 年 (980) 70~105 3 年 (980) 70~130

※その後、小・中学校においては、平成 24 年度からはこの時数は削減されている。

6 小笠原小・中学校での「総合的な学習の時間」の取り組み

(1) 小中連携の立場で一貫したカリキュラムを工夫する。

小笠原小学校と小笠原中学校は、津波を避けるために集落の背後にある丘の上に位置しており、敷地を共有している。校庭のグラウンド・野外プール・体育館は小・中学校で共同使用していて、ともに時間割など調整しながら活用している。

校舎は別であるが、すぐ行き来できる位置にあり、小中連携の立場で一貫カリキュラムなど工夫している。

「総合的な学習の時間」の実施にあたっては、小・中両校で協議し、<テーマ>を『郷土小笠原の研究』としながら、小学校から中学校へと発展できるように学習内容を工夫した。

次頁の **図-1** を参照して頂くと分かるように、小学校では学習内容として『三つの柱』を中心に学習し、中学校ではその基礎の上に立って中学生一人一人が「個別テーマ」を設定して学習するようにしている。

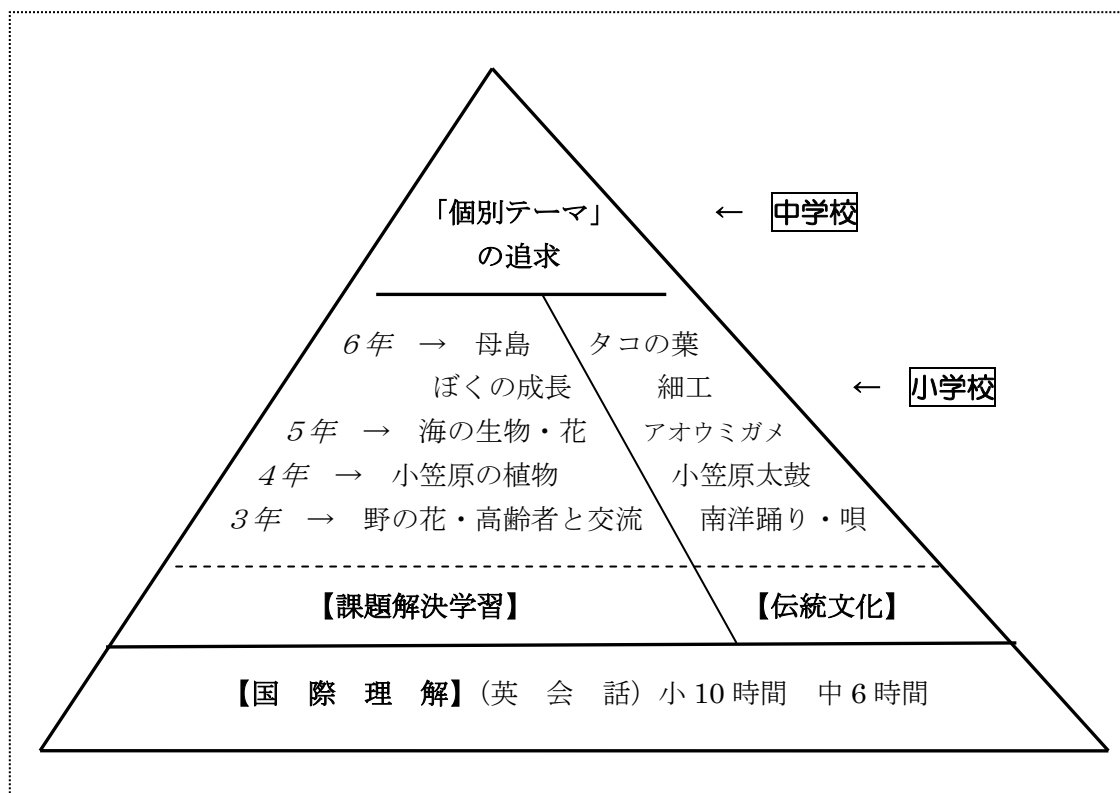


図-1 小笠原小学校から小笠原中学校へ、学習内容の発展

(2) 三つの柱…【伝統文化】・【課題解決学習】・【国際理解】について

小笠原小学校では3年生から6年生まで、各学年ごとに小笠原の自然・歴史・文化についてテーマを設定し、三つの柱【伝統文化】・【課題解決学習】・【国際理解】を中心として学習することになっていた。

【伝統文化】については、【南洋踊り】や【小笠原太鼓】そして【タコの葉細工】など

小笠原に古くから伝わる伝統芸能や伝統工芸についてそれを習得しながら体験的に学ぶことにした。

また【アオウミガメ】も小笠原の島民の生活にとって欠かせない生き物であり、伝統文化に深く根ざしているのも、その生態について子ガメの産卵、飼育、放流などを体験しながら学ぶ。学校には地域の伝統芸能や伝統工芸の保存会の方々や「小笠原海洋センター(カメセンター)」のアオウミガメの研究者を授業に招いて、伝統文化の継承・発展、アオウミガメの保護活動についてご教示頂いた。

【課題解決学習】では、身近な動植物の観察からはじめて、在来種・外来種について理解を深めながら様々な保護活動について取り組み、「東洋のガラパゴス」とよばれる小笠原諸島の貴重な世界的価値について学んでいった。

【国際理解】については、小笠原村の歴史的な伝統、すなわち、これらの島々は欧米系島民によって最初に開発され、戦後、アメリカ軍統治下に置かれ、英語による教育が行われていたという特異な伝統がある。

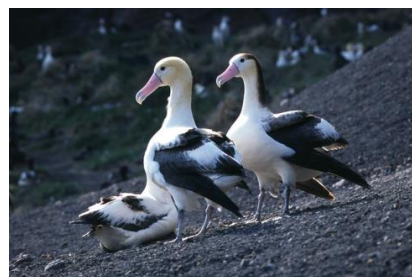
そこで、小笠原村の教育委員会は、その文化的伝統を今後も継承して行けるよう英語教育の充実を村の特色ある教育施策として取り組むこととなった。小学校1年生から中学校3年生まで「総合的な学習の時間」あるいは中学校の英語及び選択教科などで「英会話」の授業を出来るよう、ネイティブの【英会話指導員】を平成15年度から村の予算で2名招聘することとなった。父島にアメリカ人、母島にオーストラリア人の英語指導員が来島し、「英会話」の時間は、小学校10時間、中学校6時間を配当し、学年別に工夫して実施することとなっていた。

7 小笠原中学校の「総合的な学習の時間」の取り組み

次に小笠原中学校で実施した「総合的な学習の時間」の取り組みについていくつか紹介しよう。

小笠原中学校では「総合的な学習の時間」を実施するにあたって、テーマを『郷土小笠原の研究』とし、前頁の[図1]のように小学校と連携しながら学習内容を設定した。

また、「総合的な学習の時間」の実施初年度でもあったので、その開設の趣旨を十分に生かしながら、様々な「レベル」での教育活動を計画し、その成果を丁寧に検証していった。それは試行錯誤の繰り返しではあったが、それぞれの活動について次年度の実践へ効果的な積み重ねができるように工夫していった。



鳥島のアホウドリ

レベル1 講演会

教員・外部指導者による知識の伝達。従来の教科・領域の授業に近いレベル。

◇講演「アホウドリの生態と保護活動」(長谷川博教授)

八丈島と小笠原諸島の中に「鳥島」という無人島がある。ここはかつて北太平洋における【アホウドリ】の営巣地として有名な島であった。20世紀前半にはこのアホウドリは羽毛の商品価値が上がったため乱獲の対象となり、絶滅したと言われていたが、その後、少数の個体が生息していることが発見されたため、貴重な鳥類として保護活動が行われるようになった。東邦大学理学部の長谷川博教授はアホウドリ研究の第一人者として、当時、たった一人で無人の鳥島に滞在し、研究と保護活動を続けておられた。この長谷川教授が父島を訪問されたことがあったので、その機会を生かし、小・中学校での講演会を企画した。長谷川教授は当時、アホウドリの営巣地を危険な急斜面の場所からなだらかな斜面に移すことを試みられており、そのために作製したアホウドリの「デコイ」を持参され、興味深い話を小中学生対象に話していかれた。



レベル2 導入体験学習(1)…自然の観察・情報収集

自然観察や実験など、生徒が情報収集をするための多様な方法を学ぶレベル。

◇「双眼鏡の使い方」と「シオマネキの観察」(小笠原自然文化研究所・所員)

野外観察のために必要な双眼鏡の使用方法について、小笠原自然文化研究所の研究者を数名お招きし、生徒分用意された双眼鏡の使用方法について教えて頂き、樹上の鳥類を観察した後、近くの海岸に行き、その時間に生息しているカニ類の【シオマネキ】の棲息数についてカウントする作業に取り組んだ。事前に砂浜にはテープで1メートル四方の枠が作られており、生徒は指定された番号が表示された枠の中にシオマネキが一定時間に何匹あらわれたかをカウントして記録するものである。研究者からは地道な「定点観測」から生物の個体数の増減など、正確なデータが得られることなどが教えられた。



◇「サンゴ礁ウォッチング」(小笠原自然文化研究所・所員)

小笠原の海には、周囲に【サンゴ礁】が発達しており、中学生はその海に潜ってサンゴに触れることも多いが、生き物としてのサンゴを科学的に観察することを「総合的な学習の時間」において取り組んだ。講師を小笠原自然文化研究所の研究者の方にお願ひし、学校の北側にある静かな「宮之浜」という海岸の林の中に各自シュノーケリング用具を持参して集合した。



講師よりでサンゴの産卵などについての説明を聞き、その後、4つのグループに分かれて海に潜り、あらかじめ指定されたポイントを中心にサンゴ礁の海をグループごとに移動しながら観察した。

レベル3 導入体験学習(2)… 施設見学・戦跡めぐり・森林めぐり

施設見学・自然体験・社会体験などの中で生徒がそれぞれ体験を深めるレベル。

◇施設見学「小笠原海洋センター（カメセンター）」

小笠原諸島は北太平洋における【アオウミガメ】の産卵地・棲息地としても有名である。前述したように、【アオウミガメ】は島民にとって貴重な蛋白源であったこともあり、カメの捕獲法など、伝統文化に深く根ざしている。中学生は父島にある「小笠原海洋センター（カメセンター）」を訪問し、その生態についてハワイ大学で研究を続けてこられた所長の山口真名美さん（当時）より説明を受け、その指導のもとにカメの産卵、飼育、放流などについても直接に体験しながら詳しく学んでいった。



◇戦跡めぐり「身近にある父島の戦跡オリエンテーリング」

太平洋戦争中、最大の激戦地であった硫黄島での攻防の次は、父島へのアメリカ軍の上陸が考えられていた。父島では旧日本軍により、全島要塞化の方向で、砲台・防空壕などの工事が続けられていた。現在でも小笠原の父島の亜熱帯林の中には、いたるところに軍事施設の跡が残されている。そんな中を中学生たちは指導者である案内人の説明を聴きながら「オリエンテーリング」を行い、地図を見てメモを取りつつ移動していった。壕内の天井も床もすべて銅板で覆われていた巨大な壕もあり、ここには戦後特殊な兵器がアメリカ軍により搬入され、隠されていたのではないかという言い伝えもあった。

◇森林めぐり「母島の原生林と高射砲陣地跡」中学校1年移動教室

同時期、母島でも同様な要塞化が進められていた。中学校1年生は、宿泊を伴う移動教室にお隣の母島を訪問し、母島特有の【ハハジマメグロ】や【シマホルトノキ】など、貴重な天然資源を見学した。【シマホルトノキ】は島名で「コブノキ」といい、老木になると幹に瘤のようなものができる。丘の上に設置された太平洋戦争の時の【高射砲陣地跡】もそのまま残っているので見学した。高射砲は、今も空の彼方や海の果てに照準を合わせるようにして、昔のままの姿で残されている。



◇「硫黄島戦跡・慰霊塔参拝」中学校2年移動教室（後篇で報告）

中学校2年生は、平成14年度より、村教育委員会の御配慮で、学校の教育活動の一環として「おがさわら丸」で激戦の地・硫黄島に全員渡航し、多くの将兵が犠牲となった戦跡を見学したり、慰霊祭に参加することが可能となった。

詳しくは後篇で報告する予定である。

レベル4 課題解決学習…参加・体験・獲得型の授業とグループワークの工夫

生徒の一人一人が研究課題をつくり、参加・体験・獲得型の授業とグループワークへ参加する中で、課題解決を進めていけるよう工夫するレベル。

< 多様なグループワーク >

◇国際理解「国際ボランティアとの交流」

小笠原に来島する外国人環境ボランティアに授業に参加してもらい交流を深めた。また授業の中で様々な国際問題について話し合い、解決方法を考えた。

◇環境「外来種除去作業」「海底清掃」

小笠原の植物で環境破壊の原因となっている外来種の除去と、在来種の苗の植え付けについて専門家を交えてグループで作業し、小笠原をめぐる環境保全の問題について理解を深めた。また、生徒会役員が呼びかけて、休日などを利用してグループで海底に溜まっているプラスチックごみ・容器などの除去作業を行った。

◇健康「心肺蘇生法体験」

小笠原では観光客による海浜事故なども想定されるので、小笠原診療所の医師・看護師に協力して頂き、生徒全員で【心肺蘇生法】の訓練を行った。その際、キャリア教育の一環として、医師・看護師より、その業務内容や島嶼における医療上の様々な課題についてお話を伺った。

◇福祉「車椅子体験」「高齢者とのゲートボール体験」

社会福祉協議会などより車椅子をお借りし、【車椅子体験】を行った。父島には坂道や階段が多いため生徒たちは苦勞していたが、良い体験となった。

また高齢者の団体である【父島クラブ】と中学3年生の【ゲートボール大会】を実施したが、いつも練習している高齢者の方々に全く歯が立たず敗退した。しかしその後の茶話会で高齢者と中学生との交流が深められ、戦時中の小笠原の生活の様子や、「チリ大津波（1960年）」による父島の被害の様子などについて高齢者から詳しく伺うことができた。

レベル5 「総合的な学習の時間」の取り組みをまとめ、情報を発信するレベル

生徒の個別研究の成果をまとめ、それを発表するための「研究発表会」を企画。

◇学習発表会の開催

「総合的な学習の時間」の活動成果を報告するため、お世話になった地域の方々や関係機関に招待状を持参し、生徒一人一人が様々な発表形式を工夫しながら、一年間の研究の成果を報告した。



下記の表-2は その中学生による個人の「発表テーマ（例）」をまとめたものである。

表-2 小笠原中学校の生徒・個人発表の「テーマ（例）」

	発表テーマ	発表内容
1	サンゴの観察	サンゴの産卵時の海が真っ赤になったところを動画撮影
2	アノールトカゲの生態	外来種のトカゲが在来種のトカゲの棲息を脅かしている
3	オガサワラオオコウモリ	オオコウモリの個体数の減少・農作物への被害対策
4	ハカラメの成長	葉から芽がでる「ハカラメ」の皿の上での栽培と観察日記
5	DOLPHIN	三日月湾で野生のドルフィンたちと泳ぐ。個体の見分け方
6	月の観察	天体望遠鏡を使用した月面の写真や海に映る月の美しさ
7	流星群	小笠原の夜空を彩る流星群を展望台から撮影
8	小笠原診療所の見学	八丈島・父島・母島各診療所のベット数や医療機器の比較
9	小笠原の海と塩	島塩の商品としての価値商品と販売するまでの作業工程
10	戦争と疎開	小笠原村住民の戦争と疎開、硫黄島からの疎開者の苦労
11	戦跡を訪ねて	崖の下の戦跡（出撃基地）を苦労して写真撮影に成功
	☆その他	地図を描く… オオヒキガエルマップ、ガジュマルマップ・戦跡マップなど展示

<以上 前篇おわり>